

宮澤賢治の生前評価

——『日本詩人』誌上で展開される同時代批評

玉井晶章

はじめに

一、宮澤賢治とゴシップ騒動

二、覇権論争に巻き込まれる賢治

三、『日本詩人』と地方新詩運動

おわりに

宮澤賢治の生前評価について、先行研究では草野心平の主宰する雑誌『銅鑼』との繋がりがや、草野と白鳥省吾との間で繰り広げられた〈ゴシップ騒動〉等の関連から、反詩壇的なイメージが先行していたことは早くから指摘されている。しかし、こうした反詩壇勢力によって評価される存在であったにもかかわらず、大正期の主流派であり〈中央詩壇〉の代表的存在でもある白鳥によって、ある肯定的な印象を以て賢治が評価されていた点については軽んじられる傾向にある。そのため、こうした詩壇と賢治との関係性については、まだ詳しく論じられていないと言えない。本稿では生前賢治に向けられた批評のうち、大正後期の『日本詩人』誌上で展開された地方新詩運動の活動と目的を明らかにする作業を通して、中央において賢治がどのように受容されていたのかを明確化した。

はじめに

宮澤賢治の生前無名という通説について、平澤信一氏は次のような注意を促している。

〈生前ほとんど無名だった宮沢賢治〉という言い方——これは没後の名声に比べればむろん間違いでないけれど、しかし彼が実際にそれほど無名だったかと言えば、そうとばかりは言えないようにも思える。このほど約二十年振りに増補刊行された新校本全集第十六巻の資料篇をみても、その思いはますます強まるばかりだが、ではなぜ賢治は〈生前無名〉を強調されねばならなかったのだろうか。^①

平澤氏は『春と修羅』刊行から大正末年までの詩壇や詩人の批評紹介によって、賢治は中央において「それなりの詩壇評価を得た」と説明している。その上で、昭和二年三月から四月にかけて草野心平と白鳥省吾との間で繰り広げられた〈ゴシップ騒動〉を取り上げ、生前賢治が「既成詩壇に不満を持つ新興詩人たちの旗手的存在にまつりあげられてしまった」と結論づけている。このゴシップ騒動については、後述にて詳しく解説する。

構大樹氏はこれらを受けて、対外的な場において草野等が『銅鑼』誌上で展開した反詩壇的な側面が賢治のイメージ形成に波及した結果、その詩的価値が「現詩壇への技巧上のアンチテーゼを含む革新性」へと集約した点を指摘する。^②

この意見にはおおむね賛成できる。ただ実際には、中央による賢治の受容はもう少しばかり複雑であるように思われる。平澤氏は別の論に、白鳥が「生活の現実を立て」（『詩神』大正一五年九月）において「詩壇の感化なしに水際立って鮮やかな」詩人の先駆者として賢治を肯定的に捉えている点を踏まえながら次のように述べている。

宮沢賢治の『春と修羅』は、民衆派の代表的詩人に注目されながら、しかも同時に時代を担う草野らの〈不可思議な〉力となり得たのであり、いわば民衆口語詩派と昭和モダニズムの特質を併せ持っていたと言えるのである。^③

ここでいう白鳥の批評が、ゴシップの元となった大正一五年七月の白鳥の盛岡訪問と、時期的に隣接している点はさらに注意を払うべきではあるだろう。ただ、真偽はともかくとして、賢治は草野が主宰する『銅鑼』との繋がりが

ら反詩壇的なイメージを持たれていた一方で、大正期の主流派であり、〈中央詩壇〉の代表的存在でもある白鳥からも、ある一定の評価を以て注目されていたことは確かである。

もつとも平澤氏はこれらについて、このゴシップを掲載したとされる宮本吉次が露骨な反権威志向を持ち合わせていたことから、公正な編集態度に徹しているとは言えず、記事の信憑性についても懐疑的な姿勢を見せている。平澤氏は昭和二年一月の『詩壇消息』創刊号において、白鳥とともに民衆詩派の代表的詩人であった福田正夫や井上康文等を「詩壇から葬られるべき人々」として挙げ、「もつと正面に立って活躍して欲しい人々」の冒頭に賢治の名を挙げる草野の反詩壇的な一面が、宮本のゴシップと接続を果たし、賢治が「出自不明のゴシップにより、本人の与り知らぬところで、いわば草野ら新興勢力の旗印として掲げられた」と強調する点は前述の論と変わらない。

ゴシップの真偽についてはひとまず置くとしても、草野ら反詩壇勢力によって評価される存在であったにもかかわらず、〈中央詩壇〉の最大多派であり民衆詩派の代表者でもあった白鳥が、肯定的な印象を以て賢治を評価したのはなぜなのだろうか。

そういった問題を念頭に置きつつ、大正一四年末から大正一五年にかけての詩壇の動きを見ていくと、当時『日本

詩人』誌上において展開されていた「地方新詩運動」という活動に、賢治が組み込まれていることが分かる。『銅鑼』との繋がりを通して反詩壇的なイメージが先行しつつある一方で、その反対勢力である〈中央詩壇〉も、ほぼ同時期に賢治を内側へ取り込もうとしていた。ここに、二項対立の狭間で揺れ動く賢治の受容が見えてくるのではないだろうか。

本稿では生前賢治に向けられた批評のうち、大正後期の『日本詩人』誌上での動向に目を向け、中央において賢治がどのように受容されていたのかを明確にしたい。

一、宮澤賢治とゴシップ騒動

論を進めるにあたって、まず平澤氏が取り上げたゴシップ騒動の経緯について改めて確認する。このゴシップは、大正一五年七月二五日に「盛岡啄木会」での講演のために盛岡の仏教会館を訪れていた白鳥と犬田卯が、賢治のために了解を得る手紙を送った際、賢治が一旦は承諾の返事を出したものの、その後すぐに下根子桜の舎宅に寝泊まりしていた千葉恭に断りの使いを頼んだ、という逸話に由来する。

千葉の回想によると、賢治は千葉に「私を岩手にかくれた詩人で宮澤と云う者がいるさうだが、是非会って見たい

との話だが彼等は都会の詩人で職業詩人だから、我々が考へているような詩人ではない——何かうつぼな外美のもので、それを芸術と云ふなら芸術といふものは価値がないと思ふ——私はベーターペンのあの芸術の強みを考へているのです。その場合に彼等に会ふのは私の心をにごすことになるし、また会ふたところでどうにもならないし、また会ふたところでどうにもならないから彼等のためにも私のためにも会はず方が良いでしょう」と語つたらしい。

白鳥たちの元を訪れた千葉は、面会謝絶の理由を訊かれ「先生は都会詩人所謂職業詩人とは私の考へと歩みは違ふし完成しないうちに会ふのは危険だから先生の今の態度は農民のために非常に苦勞しておられますから」と答えたという。

当時一介の地方詩人に過ぎなかつた賢治が白鳥を「職業詩人」と形容し、一度受けた訪問の申し出を、直前になつて一方的に断る行為は、あるいは無礼とも言える。

この話を人づてに聞いた草野は、昭和二年の『太平洋詩人』において、次のように書いています。

宮沢賢治は銅鑼に於ける不可思議な脈である。会つたこともないし、未来どんな風に進展してゆくか、予想さへつかない。岩手県で共産村をやつてゐるんだ

そうだが、お経を誦んだり、レコードをかけたり、木登りしたり、そんなことを考へても一寸グロテスクだ。曾つて白鳥省吾が会いたい由をつげた時、私にはそんな余裕がないといつてはねかへしたそうだ。それを人づてにきいた時、私は内心万歳を叫んだ。詩集「春と修羅」はドラ社で取つぎます。

草野がこのゴシップをいつ知つたのかは判然としないが、この記事に対して翌四月に白鳥は次のように反駁している。

太平洋詩人三月号に草野君が「私が宮沢賢治君に逢たひいと言つてはねつけられた」といふやうな記事を書いて愛想を述べておりましたが、私は宮沢君とは詩集受取の簡単な札状以外に嘗て文通したる覚えもなく逢ひたいとか誰かに言伝てを頼んだこともありませぬ。私自身としても特に逢ひたいと思つたこともありませぬ。草野君が間接のゴシップで「万才」などを叫ぶとも、それは当人の勝手ではあるが、その事実は無根であることだけは明らかにしておきます。

白鳥の弁解は賢治との関係性を認める供述以外は、千葉の回想や草野の公表記事と真つ向から対立している。どち

らの証言が事実であるのは定かではないが、白鳥は「生活の現実に立て」（『詩神』大正一五・九）において「詩壇の感化なしに水際立つて鮮やか」な詩人として賢治を肯定的に評価しているのだから、少なくともそれより以前から賢治を認知していたのは間違いないだろう。

このゴシップ騒動の内容については、伊藤整の「若い詩人の肖像」においても、その騒動の一端を垣間見ることができる。平澤氏が既に詳しく解説されているが、本論でも必要なため引用しておく。

大正末期の三四年間、「日本詩人」に集った自由詩派や民衆詩派を中心とする詩人たちが新潮社といふ一流出版社から出たこの雑誌を舞台にして、活躍した。その結果三木露風と北原白秋といふ大正初期の唯美主義者や、その後に続く芸術至上主義的な日夏耿之介、堀口大学、西条八十等が詩壇の片隅に立ち退いた格好になった。それだけでなく、「日本詩人」はその次の時代に対して門戸を開放する仕方が足りなかった。吉田一穂、佐藤一英等の唯美派の新人も目立たなかったし、平戸廉吉、萩原恭次郎、草野心平、岡本潤、高橋新吉等のアナーキストやダダイスト系の詩人たちもよい発表場所がなかった。その感情は、民衆派の代表的

な一詩人で「日本詩人」の中心になってゐた某が、大正十三年に出た宮沢賢治の詩集「春と修羅」を読んで驚き、岩手県に行った時宮沢を訪ねたところ、宮沢は面会謝絶を喰らはした。そのゴシップがいかにも痛快だといふ調子で宮本吉次の編輯してゐた「詩壇消息」にこの頃書かれてゐた。私は宮沢賢治を立派だと思ひ、自分の顔が赤らむのを感じた。

そのような詩壇の若手の不満の気持が、大正の年末には、爆発的に盛り上がりかけていたのである。⁽⁸⁾

平澤氏はこの一文によつて「宮沢賢治が期せずして担つてしまつた民衆派へのすぐれた反措定としての役割を物語っている」と指摘しているが、大正後期の詩壇の様子を振り返りながら「詩壇の若手の不満の気持」を象徴する形で賢治のゴシップ騒動をわざわざ引き合いに出す伊藤の言表を借り受けるならば、大正後期の賢治には、先述した草野を始めとする大正期の新興詩人たちにとっては、反詩壇的な詩人としてのイメージが浸透していたと考えることができるだろう。

『詩壇消息』は現在日本近代文学館に創刊号のみ所蔵されており、平澤氏は三号まで発行された形跡があるとしているが、⁽¹⁰⁾以後のものは散逸しているため詳細は不明である。

「民衆派の代表的な一詩人で「日本詩人」の中心になってゐた某」とは、状況と周辺資料から白鳥省吾のことを指している^①と見て間違いないだろう。

この他にも岡本弥太が「随想 宮沢賢治」でこのことに触れていることから、少なくともこのゴシップ情報自体は、かなり広範囲に拡散・流布していたと考えて良い。

(××××、さういふおかたは知らないのですから……)と、さる俗情界に有名な東京の詩人二三人が講演旅行の途次、肺患に呻吟する花巻町の詩人を訪ねたら、玄関で断られてしまったといふ、うそらしいまことの話^②をある仙台の詩人が書いてきた。

岡本は白鳥等が賢治宅を実際に訪問し、賢治自身によって断られたと書いているが、これは先述の千葉の証言とは異なっている。岡本にこの話を伝えた仙台の詩人が誰かは不明であるが、鈴木健司氏は『詩文学』との繋がりから、石川善助の仲介を指摘している^③。

二、覇権論争に巻き込まれる賢治

詩話会は大正期を通じた詩壇の最大勢力で、当時の象徴詩派や表現派、民衆詩派の詩人達が集まり大正六年一〇月

二一日に結成された。『日本詩人』は詩話会が発行した会報雑誌で、多数の詩派が入り乱れる詩壇の中にあつて、その公器的役割を果たしていた。大正八年に刊行された『日本詩集』に続いて大正一〇年一〇月に創刊され、大正一五年一月の終刊までに五九冊を刊行している。

しかし、大正一〇年に内部分裂から北原白秋、三木露風、日夏耿之介、堀口大学といった民衆詩派以外の詩人が相次いで詩話会を脱退すると、白秋は早速『読売新聞』に「散文が詩と言へるか」と題して白鳥の「森林帯」を例にあげながら「散文としての自由形、若しくは芸術としての散文以下たるに於て、非詩、非自由詩と見るのである」と書き、民衆詩派が強調する民主精神に拠つて立つ新時代の自由詩形式に対して攻撃を始めた。それに続くように露風も「詩話会といふものは、日本詩壇の代表を今は為して居らぬ。たゞ一方に介在しているものである」と書き、詩壇としての公正な機能を維持できていない詩話会の体制について批判を重ねている^④。

続いて大正一三年一〇月に発表された「詩話会解散！」において、赤松月船は「諸君は『日本詩人』を開いて見たことがあるか。あの雑誌は、まるで福田だとか白鳥だとか川路だとか佐藤だとかの同人雑誌であるかの観がある。彼等の跳梁に対して異議をさしはさむ人間がないのは一体ど

ういうわけか。(中略) 彼等は、詩話会といふもの、詩話会の機関誌であるところの『日本詩人』といふもの、さういふものゝ名に於て彼等の意思を表現し、彼等の望むものを表現している」と書き、『日本詩人』を通して詩話会を一党独占する民衆詩派を激しく非難している。¹⁵⁾

この記事に対して福田正夫は「最後の詩話会解散問題だ。なか／＼面白い問題だが、こんな形式問題に引つか／＼つてる心事はあはれむべきだと思ふ¹⁶⁾」と下世話な批判論を持ち出す赤松に反駁した。また同様に川路柳虹も「赤松某は「読売」にわざ／＼「詩話会解散」といふ題であたかも詩話会が解散したかのやうに見せかけの題をつけ乍ら何とかかんとか言っていた、解散しろと一体誰に向つて言ったのか。会員に向つていふのなら何も新聞の紙面を借りる必要もないことだ。相談会でもひらいてやめようではないかと持ちだしてもすむことだ。何んで世間に向き直つて詩話会を解散せよと怒鳴るのか。私にはわからない、甚御苦勞なことである」と、一方的で感情的な批判論を展開する赤松を厳しく叱責している。¹⁷⁾

大正後期の白秋と民衆詩派を始めとするこうした論争について、安智史氏はそれが「時代転換の隠れた水脈として、歌(ソング)にまつわる各派の主導権をめぐる抗争」であったと指摘しているが、こうした論争を通して広がった民

衆詩派に対する反詩壇的な機運の高まりは、草野が『銅鑼』において「詩壇がよりよく洗滌さるゝために、現在の詩壇を批判し健闘するのは吾々の正義である¹⁹⁾」と、詩壇に対して反発の意を示したことから窺える。そしてそれは伊藤が言及するような大正後期のダダイズムやアナキー系を始めとした、多くの新興詩人たちが抱く不満や怒りとも決して無関係ではない。こうした詩壇の覇権をめぐる論争にほとんど巻き込まれるような形で、件のゴシップが賢治の及び知らぬ所で巧みに利用され、生前の初期的な評価にあたって、賢治が反詩壇的な詩人としてイメージ形成される遠因を作りあげたと言える。

三、『日本詩人』と地方新詩運動

昭和二年三月の『詩神』において中西悟堂は『春と修羅』を含む大正期に活躍した詩人を並べ挙げた上で次のやうに振り返っている。

詩壇は此の平穩の中で、鬱勃たる転向へと向かひつゝあつた。地方詩運動が日に月に、且つ全国的に盛んになつて新人の台頭を促す一方では、プロレタリア詩派の運動が目立つて来るし、又詩話会そのものの平板と墮勢とが稍々飽かれて、惹いて赤松月舟の詩話会解

散論となり、種々の問題を惹起した。⁽²⁰⁾

「詩話会そのものの平板と墮勢」による種々の問題が、大正後期の詩話会への反発と衰退を指すのは間違いないだろう。ところで、中西の言うこの時期盛んになった「地方詩運動」とは、大正一五年頃を中心に『日本詩人』誌上で展開されていた「地方新詩運動」のことを指すものと考えられる。

『日本詩人』大正一五年二月号においても中西は「色気の多い、騒ぎの多い、向ふ気の強い青年日本の詩壇」にあつて、官報の役目を果たす『日本詩人』の役割が決して軽少ではないとしながら「編集人の言明する所によると、今年は日本地方詩壇との提携的合奏を試みるといふことだが、一方には更に精鋭達才の士を集めて精強の歩調を整へ、かくて詩壇官報の多方面的総合を試みてほしい⁽²¹⁾」と語っているのだから、恐らくは大正一四年一月から『日本詩人』の編集人を任されていた佐藤惣之助か萩原朔太郎あたりから、その運動の内実を聞かされていたのは間違いない。この中西の言及において、この運動に加えるべき詩人の一人として賢治の名前が挙がっていることについても留意すべきであろう。

『日本詩人』大正一五年一〇月号の「地方新詩運動の経

過報告」の欄において賢治が紹介されている。主要部分を左に示す。

大正十五年度に入りて（北日本詩人の復活）に志し、館内勇、渡邊武雄、石川善助、鈴木信治、松坂竜二郎、八巻菊代、佐藤菊四郎、澁谷彦郎、等在仙の人々を初め、全東北、岩手の宮澤賢治、齋藤康一郎、鶴岡の星川清躬、秋田、青森、北海道の数人を加へて新生し、二月号よりして発刊せり。⁽²²⁾

▼宮澤賢治氏、齋藤康一郎、栗木幸次郎の二氏等勝れた人が居るのにまとまった集りは岩手詩人協会ができた迄は一向なかった。⁽²³⁾

大正十三年度に「春と修羅」を宮澤賢治氏が県下から生んだ事はよろこばしい。十四年八月、花巻町花城小学校に於て、宮澤賢治、森佐一、生出桃生、梅野草二、小野等の出品にて、詩の展覧会を開催した。⁽²⁴⁾

齋藤康一郎は大正一三年六月に「野に泣く」が、栗木幸次郎は大正一四年二月に「色彩に呼吸する」が、『日本詩人』新詩人号においてそれぞれ入選している。その中で、

一介の地方詩人に過ぎない賢治が岩手を代表する詩人の一人として選ばれ、さらにそれが『日本詩人』を通して紹介されるという事実は、賢治の中央による受容を見通す上で重要な意味を持つ。

では、この地方新詩運動を通して詩壇全体に問われる問題意識、目的とは何だったのか。その発端を溯るにあたって、大正一五年一月の『日本詩人』誌上で行われた、福田白鳥、佐藤による新進の詩人たちと地方詩雑誌についての言及に注目したい。

白鳥。それから地方の詩の雑誌について佐藤君の意見を聞きたいね、地方の詩の雑誌と云ふのも、注視すべきものだ。

佐藤。大問題だよ。

福田。その問題は佐藤君、君の意見に任せやう、僕も考へたこともあるが……。

佐藤。僕は斯う思ふ。地方誌は詩の本当の母胎だ。しかし、今の日本にはそれ程続くものがないのは遺憾だ。本当に云へば、地方雑誌を集めて更に日本を代表すべく、又、地方代表を「日本詩人」に参加せしめて、相当の日本的団結力を以て、世界に当るべき使命があるんだ。それを皆、間違へている。僕はそ

れを来年は集めて本当の日本的なものにしたいと思ふのだ。²⁵

大正一四年一月から編集が佐藤と萩原に一任され、佐藤は編集人の立場として『日本詩人』を、日本を代表する詩雑誌にするべく、地方を代表する詩人たちを集めて、より強固な団結力を以て世界と戦う使命感を表わす。これについては萩原も『日本詩人』の編集方針について同じような抱負を掲げている。

今日の詩壇には、多数の雑誌が発行されてる。その数の多いことは前代未聞である。しかし此等の詩雑誌は、概ね個人雑誌同人雑誌であつて、各自一派の傾向を立て、特種の主張を共にする同志の結合であるからして、共に一党派・一地方的に偏するもので、全般から現詩壇を綜括するものは、我が日本詩人以外にはないのである。日本詩人には現詩壇を代表するあらゆる詩派と傾向とが、殆ど広汎に綜括されてゐるから、まづ現詩壇の実況早見表と言ふべきで、そこに本誌の文壇的意義が存在している。²⁶

大正一四年の日本全詩壇総覧を確認してみると、当時東

京だけでも『明星』『抒情詩』『ダムダム』など多くの詩雑誌が刊行されていることが分かる。各都道府県の詩壇数を大小合わせて見ていくと、大正後期には実に一二七もの詩壇が全国に乱立していたようである。²⁷萩原はこうした詩壇の氾濫や詩壇否定という問題に対して、主義主張を伴わず、個性を排した本来の「官報的・会報的」雑誌としての『日本詩人』の在り方への立ち返りを目指したと言える。

こうした抱負や使命感を形象する佐藤や萩原の主張、すなわち地方新詩運動の目的とは、無秩序な増加を続ける全国の詩壇を一つに束ね、地方を代表する才能ある詩人を『日本詩人』に取り込むことにより、中央と地方が強く結びつく包括的な国民的詩壇を形成することにあつた。

無論この運動の発端となる動機的背景には、佐藤の望む中央と地方の統合と活性化を図る目的とは別に、詩壇否定の声に対する意識も当然のように含まれていたと言えよう。中西は地方新詩運動に対する考えを述べた後、詩壇否定の風潮に対する今後の展開について次のような見解を示している。

詩壇否定の声が詩壇にあつてもそれが直ちに破壊の雪崩となるには、日本詩壇はあまりにまだ建設の途上にある若者である。歴史的にも実質的にも真の黎明が

将来に約束されてゐる我国詩壇の道程は多艱多難である。この混沌と力との競り合ひのどこから味爽の笛が響き出すか。真の東洋民族の詩の勝利の道がどんなところから開拓されていくか。されば吾等は広潤な詩の大道を開くべき陣痛時代の一九二六年を相誉め相扶け相携へてゆかねばならぬ。²⁸

〈中央詩壇〉にとつて、求心力の停滞と反詩壇勢力の声の高まりは、詩壇としての活動を維持していく上でも憂慮すべき事態であつたに違いない。そんな中央の權威を復興し強化するためにも、地方で燻っている達才な詩人を寄り集め、詩壇同士の連携強化と活性化を促すことは、詩壇の衰退を瀬戸際で防ぎ、行き詰った詩形に自由と新鮮さを与え、詩壇全体の結束を高める方策であると期待されたのである。

加えて言えば、白鳥は先に挙げた福田と佐藤との談話において、地方詩人が自身のローカル・カラーを打ち出さず、周囲の現実に対して無関心である事を大いに問題視している。そして「若し地方の詩人が真剣になつて、田園から生れた詩なり散文なりを示してくれたら、極めて深い感激を詩壇と云はず、全文壇に啓示するところ、大いに多いだろう」と書き「農村の生きた見解」を詩として表現すること

の革新性を説いた。⁽²⁹⁾

要するに白鳥は、詩壇否定の渦中であつて、農民詩の興隆こそが既存の詩壇や文壇を揺るがし得る、新しい詩形であると考えていたのである。

「生活の現実を立て」において、白鳥は「農村を諸材としてゐる詩人」の先駆者として賢治の名を挙げてゐる。⁽³⁰⁾ 白鳥は『銅鑼』を通して先行していた反詩壇的な詩人としての印象を拭い去るよりも先ず、賢治を優れた農民詩人として評価することに、いち早い妥当性を見出したのだろう。それは賢治が『春と修羅』に込めた理念にも通じる。大正一四年二月九日付の森佐一宛書簡を見てみる。

私はあの無謀な春と修羅に於て、序文の考を主張し、歴史や宗教の位置を全く変換しようと企画し、それを基骨としたさまざまな生活を發表して、誰かに見て貰ひたいと、愚かにも考へたのです。

この文において重要とすべきは、序文の考によつて歴史や宗教の位置を全く変換するといった漠然としたパラダイムシフトではなく、詩的表現の革新性を、地方民としての自らの生活を諸材とすることで実験的に表現しようと試みる、賢治の創作意識そのものにあつたはずだ。そしてそれ

は、詩壇の危機に対して白鳥が唱えた「農民の生きた見解」から生まれる詩的表現の革新性と、本質的な部分において通底し合うものであつたと言える。

おわりに

以上、大正後期の〈中央詩壇〉の動向と、賢治の生前評価との関連について検討を行ったわけだが、こうした詩壇の動向と地方新詩運動の目的を明確化させた時、大正後期に白鳥が一介の地方詩人でしかなかった賢治を評価した理由も見えてくる。

すなわち、大正一五年を軸として、草野は『銅鑼』を、白鳥は地方新詩運動を通して賢治を評価し、内側へ取り込もうとしていた。両者は詩壇の覇権を争うために、才能ある若手詩人をいち早く内側へ取り込むという目的において、共有し対立していたと言える。そういった目論見の中で、賢治は無自覚のまま、新興詩人にとっては反詩壇的詩人として認知されていた。その一方で、〈中央詩壇〉にとつては、中央と地方の関係を繋ぐ岩手を代表する将来有望な農民詩人として評価されたのである。それは、中西が危惧した詩壇否定の声に抗し、多艱多難な詩壇に広潤な詩の大道を切り開き得る、新時代の詩人としての注目であつたと言えよう。

注

- (1) 平澤信一「宮沢賢治の同時代評価——〈生前無名〉神話の再検討」(『宮沢賢治研究 Annual』平成一二年三月 宮沢賢治学会イーハトーブセンター)
- (2) 構大樹「〈宮沢賢治〉の始まり——初期受容の転換点をめぐって——」(『日本文学』平成二五年二月 日本文学協会)
- (3) 平澤信一「大正末／昭和初年の宮沢賢治評価——『詩神』を軸と」(『米子工業高等専門学校研究報告』第三二号 平成七年一二月)
- (4) 千葉恭「宮澤先生を追って」(『四次元』昭和二五年四月 宮沢賢治友の会)
- (5) 草野心平「二月六日」(『太平洋詩人』昭和二年三月一日 太平洋詩人社)
- (6) 白鳥省吾「草野心平君に」(『太平洋詩人』昭和二年四月一日 太平洋詩人社)
- (7) 白鳥省吾「生活の現実に立て」(『詩神』大正一五年九月 詩神社)
- (8) 伊藤整「若い詩人の肖像」(『若い詩人の肖像』昭和三三年一二月 新潮社)
- (9) 前掲(3)に同じ
- (10) 前掲(1)に同じ
- (11) 岡本弥太「随想 宮沢賢治」(『榕樹林』昭和八年一月 榕樹詩社)
- (12) 鈴木健司「詩集『春と修羅』の同時代的受容」(『宮沢賢治』という現象 読みと受容への試論』平成一四年五月二五日 蒼岡書林)
- (13) 北原白秋「散文が詩といへるか この理由を以て書換へた」(『読売新聞』大正一一年一月一六日 読売新聞社)
- (14) 三木露風「詩話会其他に就て」(『読売新聞』大正一三年四月一五日 読売新聞社)
- (15) 赤松月船「詩話会解散!」(『読売新聞』大正一三年一〇月二三日 読売新聞社)
- (16) 福田正夫「新運動問題批判」(『日本詩人』大正一三年二月一日 新潮社)
- (17) 川路柳虹「詩話会を罵る人達へ」(『日本詩人』大正一三年二月一日 新潮社)
- (18) 安智史「民衆詩派・モダニズム・ソング」(『昭和文学研究』平成一三年九月 昭和文学会)
- (19) 草野心平「自分が他人である詩壇・その他」(『銅鑼』大正一四年一二月二〇日 銅鑼社)
- (20) 中西悟堂「大正詩壇の回顧」(『詩神』昭和二年三月一日 詩神社)
- (21) 中西悟堂「本年詩壇への一票言」(『日本詩人』大正一五年二月一日 新潮社)
- (22) 石川善助「仙台詩史」(『日本詩人』大正一五年一〇月一日 新潮社)
- (23) 森荘己池「岩手詩界」(『日本詩人』大正一五年一〇月一日 新潮社)
- (24) 照井瑩一郎「岩手の新詩運動」(『日本詩人』大正一五年一〇月一日 新潮社)
- (25) 福田正夫・白鳥省吾・佐藤惣之助「近時談叢」(『日本詩人』大正一五年一月一日 新潮社)
- (26) 萩原朔太郎「編輯に就いて」(『日本詩人』大正一四年一一

月一日 新潮社)

(27) 「日本全詩壇総覧」(『日本詩人』大正一四年二月一日 新潮社)

(28) 前掲(21)に同じ

(29) 前掲(25)に同じ

(30) 前掲(7)に同じ

付記

本文引用するにあたって旧字体は適宜現行の通用体に改めた。また、引用文の傍線は論者のものである。

本稿は佛教大学国語国文学会(平成二六年十一月二九日於・佛教大学)での口頭発表をもとに加筆、訂正を行ったものである。本稿執筆にあたり、ご教示を賜った方々には深く感謝を申し上げます。